

現代都市の核家族と生活関係構造

濱田 勝 宏*

The Nuclear Family in the Urban Society and the Life Structure of Human Relations

Katuhiko Hamada

要 旨 現代都市の核家族について、都市的生活構造の要因との関連で考察している。本稿では、生活関係構造に重点をおいた。先に、生活空間構造の側面において、「近隣」「コミュニティ」の問題をとりあげたので、生活関係について重複をさけることはできないが、核家族とその成員の生活関係のネットワークが、日常生活の経験則からみても複雑で多様な様相を示しているのは事実である。そして、とかく都市的生活様式論の立場からみると、都市生活における生活関係構造を初期シカゴ学派的な見解で把えがちである。すなわち、都市生活における人間関係は、匿名的でインパーソナルなものと断定される傾向が強い。先稿でもふれたように、このようなネガティブな評価に疑問を呈してきたところである。そこで、初期シカゴ学派への批判的修正（全面的に否定するものではないが）を加えつつあるネオシカゴ学派の人々、特にクロード・S・フィッシャーの研究に依拠して、新たな方向性を見出すことに努めた。フィッシャーの下位文化理論にもとづく都市生活における「友人」「家族」から、友人関係ネットワーク、パーソナルネットワークというラインがそのひとつであることを指摘した。

1. はじめに

現代日本の社会を社会学的に把握することを期して、社会構造の特性とその変動の方向性を見定めるための具体的局面を現代の家族集団の変化に求めて、検討の作業を進めている。すなわち、現代都市型社会における家族集団は、核家族を中心とするものとなることにより、その構造と機能とを大きく変化させたのであるが、それらの変化は、まさしく現代社会の構造とその変動を象徴するひとつの現象である。

現代日本の社会は、いわゆる高度資本主義経済を社会的経済的ステージとして、高度な産業化と都市化を達成させている。そして、その社会状況は、端的に言って高度大衆社会である。そのような社会的経済的状況のなかで、現代社会の家族集団の典型は、都市型社会と都市的生活様式を前提とする核家族である。したがって、前稿までの検討作業の基本的な場として設定した、高度に大衆化と産業化の進んだ都市空間における核家族を分析の対象とすることについては、本稿においても変りはない。

さて、都市における核家族を現代の高度大衆社会という社会的状況に照らして再検討する試み

* 本学教授 社会学

は、予想外に不透明な出発とならざるをえなかったように思う。例えば、家族集団としての核家族の社会的特性を列挙してみる。それぞれの特性のひとつひとつが、現代社会の特徴的傾向と合致するものが多い。しかし、それだけで、家族集団が核家族化していく過程で顕著になった現象は、現代社会の構造的変化の結果としてのみ解釈してよいものか。つまり、現代日本の家族集団が保有する特性は、現代の社会的変化との因果関係だけで解釈できるものは、意外に少ないと思われる。すなわち、日本の家族集団を社会史的にみると、家族集団の制度的変遷や、家族に見られる集団としての内発的な理由に依存していると思われる事がらが少なくない。したがって、核家族が現代都市の社会的経済的文化的条件を基本にして、現代社会の具体的関連性をどのように表現しているのかという分析的な視角を必要とするとの判断にたつた。

この判断の結果は、前稿まで引き続き採用してきた方法、すなわち、都市的生活構造を基盤にした都市的生活様式を基本的なライフスタイルとする核家族集団を考察の対象とするということである。

都市的生活構造は、三つの要因からなると考える。すなわちそれらは、外枠的要因（生活時間構造、生活空間構造）、媒介的要因（生活手段構造、経営・家計構造）、内部的要因（生活関係構造、生活文化構造）である。これらの三つの要因、具体的には六項目の構造要因にもとづいて、都市における核家族について考察を進めている。前稿においては、生活空間構造という視角から、核家族と都市コミュニティとの関連について論述した。

都市コミュニティにおける核家族は、都市的生活構造の基本的特性である専門機関群（国や地方公共団体、企業、特殊法人やボランティア組織など）が提供する生活財やサービス、そして各種の情報を受容し、生活に役立てるというシステムで、日常生活を遂行している。すなわち、都市空間は、生活財や各種のサービス、情報の集積地であり、都市とその地域社会は、都市住民すなわち核家族を中心的な枠組にしている市民にとっての専門機関群の合理的かつ機能的な配置を内包するものである。

しかしながら、都市コミュニティの共同体としての側面、例えば、F・テンニースが「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」で指摘した精神のゲマインシャフトとしての側面が核家族や地域住民を包括するものとして機能しているのか、となると、疑問である。また、一方で核家族は、都市コミュニティ、地域社会に対して精神のゲマインシャフトとしての機能を求め、共同性と親密性をどれほどの期待感で求めているのか、あるいは求めていないのかとなると、とりあげるべき新たな問題がここに登場することになる。

すなわち、核家族とその成員は、都市コミュニティに対して、かつての村落共同体にみられたような一体感と帰属意識を基本的にもつことはない。そして、彼らは、その社会階層的属性において、都市コミュニティとの関連を柔構造化させている。例えば、都市に典型的なホワイトカラー、サラリーマンは職場・職域を中心とする社縁の人間関係のネットワークに、また就学者は学校・塾や各種の教室といった学縁の人間関係のネットワークに中心をおいている。したがって、職場や学校という機能集団へ依拠することが優先され、都市コミュニティや地域社会・地域集団に対しては、心理的にも機能的にも距離をおくのが一般的傾向である。しかし、だからと言って、核家族と

その成員は、都市コミュニティに対して期待感をもたない、あるいは冷淡にならざるをえない傾向にあると断じてよいかとなると、必ずしもそうとばかりは言えない。そこに登場するのが、例えば「町内会」である。町内会は、半強制的な加入システムにもとづく地域集団であり、地方行政機関と連結する半行政的末端組織でもある。それとともに、福祉やサービスの分配、親睦と相互扶助、防犯や防災などの機能も担当する組織としての性格も有する。現代都市の核家族とその成員は、機能的に低下している都市コミュニティを町内会の活動によって、不十分ながら補完していると言える。そして今日、都市住民はこれらのことをきっかけに、都市コミュニティへの帰属意識を高めることを生活課題としてかけつけつある点を見逃してはならないだろう。

都市コミュニティが、さまざまな都市化の要因や新しい都市移住者の混入によって、その機能を変質させ低下させたことは事実である。しかし、上記にも述べた通り、都市コミュニティの機能低下やネットワークの軟弱化の中で、都市空間に生活の基盤をおこうとする都市住民や核家族は、ただ手をこまねいて看過するだけであったと断じてよいであろうか。実態はそうではなかったし、都市化と大都市圏の膨張がもたらした問題への取組みがなされたとみななければなるまい。そこで、核家族およびその成員の生活関係構造について考察することとし、初期シカゴ学派のとらえ方にさかのぼって作業を進めることとする。

2. 初期シカゴ学派と生活関係構造

都市に関する社会学的研究が本格的に始められたのは、1920年代のアメリカにおいてであり、その直接的な舞台はシカゴであった。そして、いわゆる都市社会学の研究は、シカゴ大学の社会学スタッフがシカゴ市をその研究対象として革新的な研究活動を展開したことに始まる。R・E・パークやE・W・バージェスをはじめとするシカゴ学派の人々は、当時、急激な都市集住現象を示しつつあった商工業都市シカゴを社会学的視点から研究したのであり、後年、彼らは初期シカゴ学派と呼ばれることになる。

シカゴは、中西部の農村地域を背後において、東部とは鉄道網で結ばれており、アメリカ中世部に急速に発達した都市である。したがって、この「都市」にはそれまでの農村社会とは著しい相違を見せる社会が成立し、新しい社会現象を看取することができたと言ってよい。すなわち、伝統的農村社会とは近隣社会や組織に著しい違いがあり、また社会的分業、経済的分業が進行する結果、人間関係は第二次集団を中心に展開されるなどの傾向が顕著になったのである。また、これらの傾向は、空間としての都市は、都市特有の棲み分けが見られるようになる。

シカゴ学派の初期を代表する研究者の一人であるE・W・バージェスは、この点に着目して都市同心円地帯理論を提示し、多大な影響を与えた。バージェスは、「都市の発展—調査計画序論—」において、同理論を展開しているが、「都市人口の密度が増加すること以上に重要なのは、人口があふれ、より広大な地域に拡大し、これらの地域が大都市地域生活にくみいれられる、相関的な傾向である」として、都市の同心円化に着目することになる(注1)。そして、都市の拡大過程において分化した諸地域の類型として示されたのが、よく知られる都市同心円地帯理論である。彼は、5つの同心円によって、都市は構成されるとした。それは、(1). 中央ビジネス地区、(2). 推移地区

(ダウNTOWN地区を囲んでビジネスや軽工業などによって侵蝕されている地域), (3). 労働者居住地区 (推移地区から逃れ, 勤務先に利便なところに住むことを希望する工場労働者や熟練労働者, 商店勤務者などが居住する地域), (4). 住宅地区 (高級アパート, ビルないし独立家族住宅の専用地域), (5). 郊外地域ないし衛星都市 (中央ビジネス地区まで30~60分の通勤時間帯の通勤者地域) に, 類型化されている (注2)。特に, このうちの推移地区は, 移民などによる新規来住者が流入するところとなる一方, 移動性の活発化 (住居間の移動, 職業の変化, 労働転換, 職場への往復移動, レクリエーションや冒険を求めての移動など) によって, 都市特有の社会問題を発生させる地域であるとしている。したがって, 都市の研究には, 貧困, 犯罪, 非行, 自殺, アル中等, 社会病理として把握されるさまざまな現象を都市病理として集中的に検討することが必要であることも指摘している。このようなバージェスの研究は, 都市を生態学的に研究する一定の視角を提示するものであった。そして, 都市の拡大という視点にたつことを忘れなかった彼は, 求心的離心化システム (a centralized decentralized system) という都市の再編成にも着目している。すなわち, 同心円として拡大する都市, あるいは都市と都市とが連結作用をおこして結果的に拡大の現象をみせる基本には, 交通機関の発達と交通網の整備, 水道・電力・ガスなど整備, 電信・電話の発達, チェーンストアの発達などの求心的離心化システムがあるというのである。これなどは, 都市を古典的な認識から解放し, 現代社会の大きな方向性として見定めた R・E・パークの業績をさらにのぐものとなったと言うべきであろう。

一方, L・ワースは, 都市社会学の研究をさらに前進させた功績をもつ。ワースは, 都市は歴史的な存在としても, また近代産業都市としても, それぞれに特徴をもっていることを十分に意識して, 都市の本質を把握しようとした。そして, 都市に共通する社会学的な特性, 都市的な生活様式をアーバニズム (urbanism) というキーワードで包括した。彼は, その代表的論文のひとつである「生活様式としてのアーバニズム」の中で述べている。「おそらく都市の諸性格のうちいくつかはほかのものより有意義となるのであって, われわれは, 大きさ, 人口密度, および都市の機能的な型における差異に応じて変ってくる都市的・社会的場面の顕著な特徴を予想できるのである」というところが, ワースの認識の基本である (注3)。そして, その結果としての都市の定義として, 「都市は社会的に異質な諸個人の, 相対的に大きい・密度の大きい・永続的な集落である」という表現に終わっている (注4)。しかし, ワースの名声を高からしめているのは, 周知の通り, アーバニズムの理論である。彼は, 「都市社会学者の中心問題は, 大量の異質な諸個人の, 相対的に永続的な・密度のある集落に典型的に現われる社会的行為および社会的組織の諸形態を発見することである」と述べて, アーバニズムの認識の必要性を説き, その輪郭を提示している (注5)。彼は, 一貫して都市とアーバニズムの基本的要因に, 人口量 (人口集合体の大きさ), 密度, そして異質性の三点においた。そして, その基本的要因が極限化するほど, 都市はその時性を明確化し, アーバニズムは都市住民ひいては現代人に問題をつきつけるとしたのである。そして, アーバニズムの理論的展開にあたっては, (1). 生態学的視角におけるアーバニズム, (2). 社会組織形態としてのアーバニズム, (3). 都市的パーソナリティと集合的行動という局面でのアプローチが必要であると説いたのである。本稿の中心課題である人間関係については, (2)の局面で大きくとりあげてい

る。すなわち、「都市的生活様式の明確な性格は、社会学的には、第一次的接触の第二次接触との交替、親族の紐帯の弱化、家族の社会的意義の減少、近隣の消失、および社会的連帯の伝統的基盤の崩壊にある、とこれまでしばしばいわれている。これらすべての現象は実際にも客観的指標を使って立証することができる」と、かなり断定的に述べているのは注目に値する（注5）。

ワースのこのような認識は、初期シカゴ学派の都市の人間関係や地域社会に関する把握の基本部分をなすものであり、その後の都市社会学にも大きな影響を与えるものとなったのである。しかし、その後のアーバニズムの理論的検討や都市化社会の実情は、ワースに代表されるような捉え方だけでは説明しきれないものとなったと言ってよい。その点について、徐々に検討を進めていきたいと思う。

以下、都市における生活関係構造を考察するにあたり、先にも述べたように、都市的生活構造を基盤とする都市的生活様式、すなわちアーバニズムとの関係枠で捉えるものとする。そして、生活関係構造は、核家族を典型とする都市型家族の日常生活における人間関係の側面という意味で、家族関係、親族関係、地域関係、職場関係、友人関係などを包括するものとする一方、個々の人間関係の領域についても必要に応じてクローズアップさせたいと思う。

3. 都市的生活様式と生活関係構造

都市的生活様式を基本とする核家族の生活関係は、家族集団を単位とする地域社会、コミュニティへの関与がどのような実態かという点で考察をはじめることができる。そして、ここまでの検討作業を通じていえることは、地縁的な人間関係つまり都市コミュニティへの関与の度合いが一般的に低く、むしろ社縁の人間関係や学縁の人間関係に重点をおくものと認識されるということである。しかし、核家族集団はもちろん、都市住民としての成員ひとりひとは、都市コミュニティへの関与を必要としないのではなく、そのきっかけをある限られた近隣の関係や町内会などに求めているにすぎないという捉え方である。

これまでの都市コミュニティをめぐる人間関係は、概ね、上記のような認識にたつことが一般的であり、それは、都市の拡大と都市住民や核家族の移動性の高まりが都市コミュニティの成立を困難にさせているという認識であった。しかし、都市そのものが、特に現代日本における高度経済成長の終息による方向転換によって、拡大・拡張の方向をたどるとはかぎらないといった変化を見せるようになった。その結果、都市住民にとって、都市空間における自然環境との関わりをはじめ、その社会関係・生活関係において新しい生活課題が数多く浮上するにいたった。このような変化が顕著になる頃から、都市コミュニティに関する一面的な捉え方は、次第に有効性を失なうようになったのである。

核家族を包摂する都市コミュニティは、将来にわたってどのように推移するのか、そして、核家族は都市コミュニティとの関わりをはじめ現代都市における生活においていかなる生活関係構造を設定しているのか、以上の2点がこれからの具体的な問題である。

都市的生活様式あるいはアーバニズムが現代生活に一般化するにしたがって、都市コミュニティはその機能を低下させ、低下させればさせるほど有機的連帯性を後退させる、そしてひいては成立

自体が困難になる傾向すら見せることは、事実あったといえよう。ただし、くり返し述べているように、この一面的な把握は次第に意味をなさないものとなってきた。その点について、森岡清志の指摘を参考にしながら考えてみたい。

森岡は、現代都市生活の諸相を述べるにあたって、以下の5つの概念を用意している。すなわち、①. 社会分化における異質性の増大、②. 分節型社会から脱分節型社会、③. 都市的生活様式の深化、④. 友人ネットワークの同質性の増大、⑤. セグメンタルなライフ、である。そして、①から③の都市型生活の構造的変化の結果、④ならびに⑤という傾向が顕著になると認識する（注6）。

社会分化とは、社会的成層または社会階層の区分要因にもとづく階層的分化を意味することここでは理解するものとする。そこで社会分化には、基本的に垂直的分化と水平的分化があり、この二つの分化における変化が異質性を増大させていると、森岡は主張している。

垂直的分化とは、個々人の社会的属性を構成する要因のうち量的に表示しやすいもの、すなわち、学歴、収入、職業威信、年齢、居住年数などを基本とするもので、いわばタテの分化をいう。一方、水平的分化とは、性、民族・人種、国籍、出身地、婚姻、職業など、質的に表示すべき要因にもとづくヨコの分化というべきものである。

これら垂直的分化と水平的分化の座標軸がバランスよく維持されることによって、社会階層の分化を見渡すことができるとされたのがこれまでの社会であったとすれば、現代社会はそのバランスが崩れつつあるとみるべきであろう。すなわち、森岡によれば、「たとえば職業は、いかなる職種であろうとそれぞれが固有の価値を付与された『天職』として位置づけられ、また日本においても『職業に貴賤なし』といわれたように、もともと異質な、水平的な性格をもつ属性であった。しかし現実には、職業に対する人びとの序列づけ、すなわち職業威信が成立するように、職業をひとつの指標とする水平軸は、垂直軸へ向けて転回を行っているのである」（注7）。つまり、森岡の表現を借りれば、水平軸の垂直軸への転回が生じていることになる。また、一方ではこれと逆に垂直軸の水平軸への読み換え、転回も見られる。このような2つの軸の交互の転回によって、結果的には、人種・民族、国籍といった水平的分化の指標が前面におし出されることによる異質性が強調されることになる。さらに、性ないしジェンダーが強調されることにより、男女の人間としての同質性と、社会的異質性にもとづく過程ないし処遇の不平等あるいは結果の不平等という問題での是正を考えねばならない状況がある。これは、性ないしジェンダーの問題を契機にして新たな規範の形成と制度の整備をもたらしている。つまり、かつては男女の性別という単なる水平的分化の要因にすぎないとされたものが、垂直的分化要因に読み換えられるべきものとされることによって、いわゆる異質性の強調要因にもなっている。

次に、氏は、都市社会における生活は、本来的に、世帯・地域、学校、職業という3つの時空間に分割されるものだとする。そして、「都市社会において学校的時空間、会社の時空間、そして世帯・地域の時空間に分節化される。学業期にある者は、学校的時空間と世帯・地域の時空間の間を往復し、就業期にある者は、会社の時空間と世帯・地域の時空間を往復することになる」（注8）。したがって、世帯・地域の時空間を専らとする専業主婦はこの時空間に閉じこめられるとい

うように見るのが、都市の分節化ということである。「分節型都市社会は、人びとの生活の時空間とライフコースを単に分節化しているだけでなく、社会的時空間と学校的時空間を優位化し、社縁中心的関係形成と学縁中心的関係形成を推し進める点に、その特色を見出すことができる」(注9)。

しかしながら、現代都市の勤労者の勤務形態、学生・生徒の学校との関わりに、今日的な変化が見られることは事実である。また、時間の自由裁量という意味で優位にある専業主婦はもちろん、現代人の余暇活動、ボランティア活動の展開などは、分節型都市社会の中にくくってしまう訳にはいかない状況を呈している。すなわち、分節型社会から脱分節型社会への移行が始まっていると言っているように思う。

第3に、現代人の都市生活は、いわゆる都市的生活様式をますます深化させているとみななければならない。言うまでもなく、都市社会は、高度に専門分化された社会であるところに大きな特性がある。「都市生活者は、生産生活において、専門分化した職業に従事し何らかの財を不特定多数の他者に供給し、他方、消費生活において多数の他者がそれぞれにその職業において供給する財を消費する主体である」(注10)。

都市生活は、このような原理にもとづく共同性を内包しており、そもそもその原理が都市的生活様式であると言ってよい。そして、経済的に高度化し、科学技術の粋を社会全体にはりめぐらし、しかも、生活感覚や具体的な生活技術にも大なり小なり変容を迫る現代社会は、文字通り、都市的生活様式の深化した社会である。同じような深化の過程は、今後さらにスピードアップした形で進行するであろうと予測できる。そうであるとすれば、原則的には、都市生活者の生活課題は、先の専門分化という意味で専門機関の処理、行政サービス機関などの援助や情報提供に委ねられることになる。しかし、個々の都市住民にとっては、地域的な共同生活課題の解決・処理ということが、それらの次元より身近な時空間でしばしば浮上することになる。この辺りに、再び都市コミュニティの必要性が高まり、都市生活者の関心の再生をみておく必然性がある。

以上、社会分化の異質性の増大、分節型社会から脱分節型社会への移行、都市的生活様式の深化をみてきた。

これらの都市生活における変化の要因は、現代都市空間における都市住民の生活を2つの意味で新たな方向に導いていると言ってよい。端的に言って、その第一は、ライフスタイルの変化、セグメンタルなライフスタイルの登場である。現代日本社会の状況や現代人の生活における価値観には、大きな底流の変化があると思われる。森岡の表現を借りるならば「生活の私化、すなわち私的生活事象への関心の肥大化傾向は、これまでライフスタイルを深層において規定してきた現象である。そして今、生活の私化を促進する生活価値意識は欲望主義に貫かれたモノ充足志向から、少しずつ変化してきている」(注11)。その結果、ライフスタイルが変化する方向に展開するとみてよい。ライフスタイルは、「意味充足志向とネットワーク志向の高まり」に対応するものとして変化しつつある。そして、社会分化の異質性と都市的生活様式の深化が、これまで以上に多様なライフスタイルの登場を促している。また、「1人がひとつのライフスタイルをもつのではなく、1人が複数のライフスタイルをもつようになる」という変化でもある(注12)。

このようなライフスタイルの変化は、次なる変化を促す要因となる。すなわち、第二のそれが、まさに主題の人間関係の変化である。すなわち、現代都市住民の人間関係は、分節型社会に基本とされた一定の閉鎖性をともなうものから、弾力的で開放性に富むものへと変化しつつあると言える。そして、その中心となるものは、地域、学校、職場、ボランティアな集団や組織など、一人ひとりの生活関係構造に位置づけられる友人関係を基本とする枠組、すなわち友人ネットワークである。もちろん、家族・親族はもとより、各種の社会関係をもつ社会集団の中における個人の人間関係の枠組、いわば硬直的な人間関係が意味をなさないということではない。まして、それらの人間関係や組織・集団が機能しないということでもない。旧来の人間関係のネットワークを上回る形でのタテ・ヨコの意味を問わない友人ネットワークの形成が見られるということである。森岡は、将来的にはネイバーフッドモデルを核とするコミュニティパラダイムの終焉によって、ネットワーク型コミュニティパラダイムが成立するだろうとの予測を展開している。しかし、現状に対する分析の結論としては、以下のような見解をとっている。やや引用が長きに及ぶが、次の通りである。「大量人口の集住と専門サービスへの高度依存は、ライフスタイルの似かよる人びとの出会いのチャンスを増大させる。個性的で特色あるライフスタイルをもつ人ほど、人口量の小さい集落では不可能に近かった友達がしが可能になる。要するに人口量の増大は友人形成の機会を増大させる。一方、日常生活課題の多くが専門サービスによって処理されるようになると、親族・近隣関係からの相対的離脱が進むようになる。また専門サービスを選択的選好的に享受する都市人が増加することは、似かよったライフスタイルをもつ他者を選択しうるチャンスが増大することでもある。このようにして第一次関係における友人関係のウェイトは都市化とともにますます高まっていく」(注13)。

現代社会の都市生活における友人関係ネットワークの重要性を認識する点では、指摘の通りだと思う。難を言えば、親族・近隣関係からの相対的離脱の側面だけで、結論づけてよいかということである。つまり、森岡は、親族・近隣関係から相対的に離脱する傾向がある一方で、それらの中にも親しい親族を求めるといった傾向を指摘したのであって、親族・近隣関係との離脱や絶縁を言っているのではない。その点は、十分に了解するとしても、今日的な親族ないし姻族との関係の強化の一面、例えば少子化世代が家族を形成する過程での関係変化の部分もとりあげてよかったのではないか。また、町内会をはじめとする地域集団が再評価されたり、コミュニティネットワークという名で地域社会の再編成がなされている点なども着目すべきと考える。この点については、前稿で述べたので繰り返しはさけるが、都市生活者が町内会等の地域集団へ再び依存度を高めていることは事実である(注14)。

いずれにせよ、現代都市生活者の生活関係構造は、一方において、核家族中心の家族・親族、地域、学校、職場、ボランティアな社会集団や社会関係等々を基本とする人間関係ネットワークを包含している。そして、他方では、これらにも通底するような形ではりめぐらされた友人関係ネットワークがあるということである。そして、この2つのネットワークは、一人ひとりの属性として成立している階層的特性とライフスタイルの相違などとの関係によって、微妙なバランスを有するものとなっていると言うべきであろう。

4. 核家族と友人ネットワーク

現代都市の核家族の生活関係構造は、2つの枠組で形成されていると認識できるが、その基本が友人関係ネットワークへ移行しつつあると言ってよい。

ところで初期シカゴ学派の理論を批判的に検討している研究者が、近年、様々な所論を発表している。L・ワースのアーバニズム論や都市生態学理論についても検討が加えられていることは周知の通りであるが、批判的修正を加えつつ「下位文化理論」を展開しているのが、クロード・S・フィッシャーである。フィッシャーは、L・ワース派の理論を「決定理論（生態学的決定理論）」として都市社会学のスタンダードとして評価しつつも、その限界を認識している。そして、L・ワースを批判したH・ガンスのサバーバニズム特有の生活様式論の向いを張っている。つまり、フィッシャーは、H・ガンスの所論を「構成理論（社会構成理論）」としている。すなわち、都市であれ郊外であれ村落であれ、居住地の都市度にかかわらず、住民の生活様式は住民が社会構造に占める位置、つまり社会経済的地位（職業、所得、学歴など）と人口学的地位（年齢、性別、家族周期、エスニシティなど）に規程される。これら社会分化の垂直性と水平性の問題は先に見た通りであるが、構成理論として一括される理論は、フィッシャーをアーバニズム、都市生態学理論を再検討の方向に向け、結果的に下位文化理論を創出させているのである（注15）。

「下位文化理論は、アーバニズムは社会生活を形成する——しかし、決定理論と違って社会集団を破壊することによってではなく、むしろ強化することによって形成する——と主張する。コミュニティの規模がおよぼす最も重要な社会的効果は、多様な下位文化（ミュージシャンや学生や中国系アメリカ人のような文化的に特徴的な集団）を促進することである。下位文化理論は、構成理論と同様に、親密な社会圏が都市環境において存続していると主張する。しかし、決定理論と同様に、生態学的要因がコミュニティに重要な変化をもたらすと主張する」（注16）。

フィッシャーの説く下位文化理論は、初期シカゴ学派以来、とかく強調された都市における個人の孤独化や家族の孤立、心理的紐帯の喪失、アノミーなど、都市社会や都市型生活のマイナス面を見直している。下位文化が成立し、その中で展開される人間関係、すなわち友人関係ネットワークが強化されることによって、都市が内包する病理的要因の修正がなされるという見解にたつものである。したがって、都市の社会関係の重要なネットワークのひとつとして、友人関係をとりあげることになる。

フィッシャーは、「友人関係は複雑な社会関係である」とし、友人関係が自然発生的であり、かわりあいのある人びとによって自由に選択されるものという特性をまず踏まえている。「たしかに、ほとんどの友人は、同時に隣人であったり、同僚であったり、親族であったり、それ以外の何らかの点で結びついていたりしており、純粋な友人であることはまれである。われわれは、他の文脈において知っている人びとから友人を選ぶ傾向にある。これらの文脈は、われわれがそこから友人を引き出す『貯水池』である」（注17）。友人関係の貯水池は、村落的環境と都市的環境によって違いがあるか否かの問題に言及しているフィッシャーは、二つの環境での決定的相違はなく、友人や友人関係に含まれるニュアンスの相違に注目している。そして、「都市の友人関係は、村落の

友人関係よりもいっくらか親密であるはずだ。なぜなら、都市の友人関係は、独特で同質的な、自由に選択された下位文化からあらわれる可能性が高いからである」(注18)。このような断定のしかたは、都市社会や都市生活における彼のいう下位文化の存在にもとづくものである。

フィッシャーは、友人関係と同じように、家族に注目している。フィッシャーは、決定理論や構成理論の立場にたつ家族の見解について検討を加えている。これらの理論に共通するのは、家族機能の縮小であり、一面において家族の人間関係を軟弱化させるという特性である。また、家族も都市病理の影響を受けて離婚や婚外子の増加などが指摘されてきた。それらに対し、フィッシャーは「一般に、人びとの核家族の結合度については、コミュニティの規模によって大きな違いはないが、都会人は拡大親族との結合が弱い」という点に注目している(注19)。そして、都市家族が形式論的にその親密度を低下させていると観察することにも、異論を唱えている。例えば「都市家族が成員に供給する物質的サービスの明らかな減少を考慮に入れると、なぜ家族の親密さが弱くならないのかは、手短かに考察してみる価値がある。ことによると——都市家族の崩壊を予想する諸理論の前提に反して——経済、レクリエーション、サービス、その他のそのような付随的機能は、家族の強さをつくる素材ではないのかも知れない。その『素材』は、もっと個人的で、情緒的で、心理的なものである」(注20)。都市化による核家族化の進行と機能の縮小は念頭におくとしても、そうであればあるほど家族成員の心理的紐帯の強まりを指摘する論理は、従来、あまり見られなかったところである。フィッシャーは、アメリカ諸都市の調査をもとに、述べている。その点では、実証的であり、信頼度の高い論理である。ただ、現代アメリカの都市社会の状況をそのまま直線的に日本の現代都市生活にあてはめてよいかは、検討を要すると言うべきであろう。いずれにせよ、都市における核家族とその成員の生活関係構造が、都市コミュニティや社会集団との関係において友人関係ネットワークを確実に設定しようとしていること、そして核家族成員はそのための心理的条件を明確にもっているということは、結論的に踏まえておいてよいものと判断する。

さて、友人関係ネットワークについて、若干の補足をし、次の試論の橋渡しのひとつにしておきたいと思う。それは、生活関係構造をソーシャルネットワークとパーソナルネットワークの両面からなるものとして捉えることにより、いまとりあげている友人関係ネットワークとパーソナルネットワークとをほぼ同一のラインにあるものとして考えてみようということである。つまり、既に述べたように友人関係ネットワークは、今日的な都市生活においては、都市コミュニティや社会的な各種機能集団との関係にある制度的生活関係にも内在していると言える。しかし、友人関係は、とにかくにもインフォーマルな性格を色濃くもつものであり、その点ではパーソナルネットワークとの重複は当然であるからだ。

先にとりあげたC・S・フィッシャーをはじめとする初期シカゴ学派への批判的再検討の作業を行った人々の間に、都市化とコミュニティの存続に関する議論がある。総括すれば、B・ウェルマンなどを中心とする人々の調査結果から、都市コミュニティ変質説が高く評価されている。ウェルマンは、これまでの議論を崩壊説、存続説、変質説の三つに整理している。すなわち、彼はカナダのトロント市民のパーソナルネットワークの調査データを駆使して検討し、プライマリーな絆の普及とその重要性を認識しつつその絆は従来のものとは異質のものとなってコミュニティを支えてい

るとしている。つまり、ウェルマンは変質説を支持している訳である（注21）。ここに登場する基本的な考え方は、コミュニティの本質が、地域限定的な連帯を念頭におく地域性や共同性にのみ求められるものではないということである。むしろ、近隣として共住する者とか親族であるとかの条件や枠組を越え、個々の信頼やニーズを契機に成立するネットワークがコミュニティを形成し、「ネットワークとしてのコミュニティ」、「パーソナルコミュニティ」という視点も用意されるようになってきている。結局、このような把え方にたつということは、先にも述べたことではあるが、「これまでの研究のように人間関係を『親族関係』『近隣関係』『職場関係』『友人関係』と個別に分析するのではなく、それらの相互関係も含めて総合的に分析するところに特徴がある」（注22）。核家族やその成員が、社会的諸集団をとり結ぶ社会関係、生活関係は、都市コミュニティに限らず、さまざまなネットワークとなって実質的に機能していることを前提として分析しようとする方法は、初期シカゴ学派が唱えた都市コミュニティへのネガティブな評価をひとまず退けることに成功した。そして、都市的生活様式にもとづく生活関係構造が比較的狭隘な人間関係ネットワークに閉鎖されがちであるとか、匿名性を前提とするインパーソナルな関係に陥りがちであるといったような把え方にのみ終始してはならないとの自己批判にもつながるものと言わねばならない。

そのような観点をふまえつつ、C・S・フィッシャーは、その初期の検討作業において、都市化の進行と人間関係のネットワークの形成について指摘している。例えば、ネットワークの規模すなわち交際範囲にある人々の総数は人口規模の大小に比例するものではなく、また、調査段階で大都市と規定した都市空間にもパーソナルな人間関係は存在するとした。むしろ、ネットワークの種別に着目すべきであるとしている。つまり、より都市化の進んだコミュニティの住民ほど、ネットワークのなかに親族よりも各種の友人との関係を明確にあげる傾向が強いということである。フィッシャーの北カリフォルニアにおける調査から明らかにされた事実は、今日でも、都市規模の近似した地域における調査を通じて共通した結果が報告されており、それだけに信頼度は高い。

ここまでのところ、都市コミュニティを出発点とする都市生活のネットワークが、いわゆる友人関係ネットワークとして把えられることに注目した。実際の調査においては、学校・職場を通じたもの、専業主婦の社会的参加を念頭においたもの、そして、仕事や子育てを伴いながら職業に従事する女性のネットワーク、あるいはそれらの異文化比較などに及んでいる。それらのすべてを、ここで俯瞰することは、事実上、困難である。ただ、友人関係ネットワークが、家族・職場・学校、ボランティア活動などの社会参加活動を契機とする場合であれ、また、純粋に個人的なニーズや単なる偶然によるものであれ、都市的生活様式を前提とする事実は変わらない。

G・アランは「友情は、ヒエラルキーや権威の問題が意味をなさない結びつきなのである。友情のうちにあっては、友人たちは、たとえ部外者がそのように扱わなくとも互いを平等に扱い、自分たちの関係の中では全般的に互酬性があり等価交換のなされていることを確信している。友情がもつ一見単純明快な特徴は、友情の社会的意義を理解するのに中核となる多くの意味を含んでいる」と述べている（注23）。友人関係の基本には、ヒエラルキーや権威とは無縁な平等と互酬性が潜在するからこそ、都市的生活構造の人間関係を形成する重要な要素として認識しなければならないと思う。つまり、友人関係ネットワークは、従来は、コミュニティや集団・組織の枠組の中で、結果

的に形成されるという側面に重点をおく形で注目されてきたと言ってよい。その点を十分に残しつつも、友人関係ネットワークは都市的生活様式にもとづく現代人の日常生活におけるコミュニティ機能を果たすものと位置づけるべきではなからうか。複雑で多様な都市的生活構造においては、情報通信ネットワークの飛躍的な変化と情報通信機器の急速な普及が、都市的生活様式を新しい方向へさらに変化させている。これらは、フィッシャーが注目した都市空間における新しい人間関係、すなわち友人関係ネットワークの重要性を強調すべきものにする。同時に、ネットワークそのものを、従来では考えられなかったほどの多様化へと導いていくと思われる。事実、電話（それ自体が多様化している）、パーソナルコンピュータ、インターネットなどの普及や日常生活への応用をみれば、明らかである（注24）。それらを媒介とする人間関係、友人関係ネットワークについての研究も進行しつつあるが、この点については稿を改めたい。

注

- 1) 鈴木 広訳編『都市化の社会学』所収、E・W・バージェス「都市の発展—調査計画」、p. 114, 誠信書房, 1970.
- 2) 同上, p. 116~p. 117, p. 120~121.
- 3) 鈴木 広訳編, 前掲書所収。L・ワース『生活様式としてのアーバニズム』p. 132.
- 4) 同上, p. 133.
- 5) 同上, p. 143.
- 6) 蓮見音彦・奥田道大編『21世紀日本のネオ・コミュニティ』所収。森岡清志「都市的ライフスタイルの展開とコミュニティ」, 東大出版会, 1993, p. 10.
- 7) 同上, p. 12.
- 8) 同上, p. 17.
- 9) 同上, p. 19.
- 10) 同上, p. 21.
- 11) 同上, p. 28.
- 12) 同上, p. 29.
- 13) 同上, p. 30.
- 14) 濱田勝宏「現代の都市コミュニティと核家族」『文化女子大学紀要人文・社会科学』, 第7集, 1999年.
- 15) クロード・S・フィッシャー『都市的体験』松本 康・前田尚子訳, 未来社, 1996, p. 407~409.
- 16) 同上, p. 55~56.
- 17) 同上, p. 193~194.
- 18) 同上, p. 195.
- 19) 同上, p. 205.
- 20) 同上, p. 207.
- 21) B. Wellman "The Community Question: The Intimate Network of East Yorkers" *American Journal of Sociology*. Vol. 84, No. 5, 1979.
- 22) 鈴木 広編著『現代都市を解説する』ミネルヴァ書房, 1992, p. 313.
- 23) G・アラン『友情の社会学』仲村祥一・細辻恵子訳, 世界思想社, 1993, p. 30.
- 24) 渡辺 潤『メディアのミクロ社会学』筑摩書房 1989などは、電話をはじめ各種のコミュニケーション・ツールを素材とし、コミュニケーション、ネットワークの急速な変化に言及している。